

# スキー部

設立	1964年5月
部長	中野 誠彦(電子工学科)
代表者	渡辺 康隆(監督、1977年卒)
会員数	250人
学生数	若干名(2012年4月現在)

## はじめに

工学部体育会スキー部が小金井に創部された1964年から矢上へ移転する1971年までを第1部、矢上に移転してから現在(2012年)に至るまでを第2部に分け、歴史を記録すると共に当時の部員が思い出を綴る。

当初の目的は、競技スキーを行うこと、特に関東理工系大会に毎年参加することであった。その後、理工学部への改編や時代の変遷により、現在は理工学部生としての新入部員は少なく、他学部生も含めて中野准教授(電子工学科准教授：当部OB)を部長として活動を継続している。

## 第1部 工学部体育会スキー部の創部

小金井時代：1964年から1971年まで

### ◇創部当時の思い出

#### 創部の頃の忘れられない思い出

23期機械 千葉、阪田

工学部体育会スキー部を結成したのは、1964年5月か6月だったと記憶している。その年の4月、2年生となって小金井に通い出した23期生は、それまで同好会として一緒にスキーを楽しんでいた。しかし、ゲレンデスキーでは物足りなく、競技スキーをやろうということになり、競技スキーの運動部を立ち上げ、工学部体育会へ加盟しようと動き出した。メンバーの交友関係を軸に、誰彼となく幅広く勧誘して参加者を募って回った。

少し前の1956年冬季オリンピック、コルチナダンペッツオ大会でアルペン三冠王のオースリアのトニー・ザイラー選手らが来日し、主演のスキー映画『白銀は招くよ』が大ヒットした。同

大会の回転競技で、猪谷千春選手が銀メダルを獲得したこともあり、日本にスキーブームが起きつつあった。

これが幸いしたのか、短期間で約50名もの登録者が集まった。中にはスキーを全くしたことがない、体育会の経験もない、ただ交友関係の付き合いで何ともなしに入部したという部員も多数いたことも事実である。

こうした人数を背景に、計測工学科の佐藤(力)助教授に部長をお願いし、同好会だった我々のグループは、工学部体育会スキー部となった。部室と活動費も支給されることになり、部員数では工学部体育会でも3番目か4番目の大所帯になった。

練習は、雪の無い時期(それが大半だが)はひたすら体力強化が目的のマラソン、筋トレなどであった。隣接する多磨霊園一周約5キロのマラソン、グラウンドに戻ってからのうさぎ跳び、腹筋、腕立て伏せなどを日課とし、毎日体力強化に励んだ。トレーニングのメニュー、やり方は、キャプテン・千葉が慶應高校スキー部時代にたたきこまれたものを、ほとんどそのまま踏襲した。

初めての夏休み、早速、合宿を池の平高原で行った。起きぬけの10分間の縄跳び、朝食後白樺湖周辺のマラソン、近くの小山への駆け上りなどが合宿中の主なメニューだった。これがまだ十分体力ができていなかった部員達にはハード過ぎた。

合宿がスタートして数日過ぎた朝、こんなことがあった。部員たちが一室に集まり机を囲んで出てこない。合宿中の「マージャン禁止令」を解けというのが要求だった。「こんなハードなトレーニングでは体が持たない、練習後の空き時間はヒマで何もすることが無い、合宿といえど

も楽しみが欲しい…。」思わぬ形でストライキが勃発し、執行部は大いに困惑した。「競技スキー部の合宿なのだからハードな練習はつきもの、合宿でマージャンなんてとんでもない…」、これが執行部の主張だった。マージャン卓を囲んでストライキをしている部員達の、襖一枚隔てた隣の部屋で僕たちは額を寄せ合って協議した。結局、マージャン問題は夕食後の時間を限るということで決着した。工学部スキー部について回想するとき、いつもこのスト騒動が懐かしく思い出される。当事者達は創部に参加してくれた同級生達で、先輩後輩の関係にはもちろんない。だからこそ遠慮なく意見をぶつけられたのだ。

この年、部が発足して初めての冬、野沢温泉スキー場で初の合宿を行なった。宿はサブキャプテン・阪田の行きつけの野沢温泉の「かめや」旅館で、3食付きで500円という当時でも破格の安さだった。白米と野沢菜は食べ放題で、当時都内に下宿している学生の一日の生活費よりも安かった。

問題は部員のスキー技術レベルの格差だった。練習は、初めてスキーを履いた者など超初心者には野沢温泉のスキー学校へ、上中級者は競技スキーの練習の二本立てで始まった。それぞれのレベルでそれなりにきつい練習だったと思う。練習後は皆で雑魚寝して夜遅くまで話したり、合宿最後の打ち上げは皆ですき焼き鍋をつついたりし、ハードながらも楽しい合宿生活を送ることができた。その後春休みにも2回の合宿を行い1年目の活動を終えた。

キャプテンが阪田にかわり2年目に入った。間もなく日大理工学部スキー部より、理工系合同のスキー大会の打診があり、数回の打ち合わせの結果、記念すべき第一回の関東理工系スキー大会に参加することができた。大会は猪苗代スキー場、参加校は7校程度でわが工学部スキー部は11位が最高であった。

一丸となってスキー部を立ち上げ、共にハードトレーニングに汗を流したメンバーはその後もほとんど欠けることなく部は存続し、幸い後

輩にも恵まれ4年になりバトンタッチできた。

(本節をまとめるにあたり、同期の高田、新井、有賀君の協力を得た。)

## ◇スキー部合宿の思い出

25期 計測 栗田 容豪

入学後の小金井でのオリエンテーションの席で、スキーは未経験ではあるが北海道育ちのせい、即入部を決め4年間在籍した。

3年の頃まで、部長は計測工学科の佐藤助教授で、映画「黒い稲妻」の如く、黒のスキーウェアでさっそうと、また優雅に滑り大変旨かった。佐藤助教授のアメリカ留学という事情で管理工学科の林助教授を推薦してもらい、1966年より部長に就任してもらった。林部長も大変スキーが旨く、野沢の上の平からシュナイダーコースを息も切らせず一気に滑り降りる腕前で、ついて行くのがやっとなという印象が残っている。

入部当手を振り返って見ると、スキー部は発足間もない頃で先輩の人数も多く、皆意気に燃えていた。そのお陰というか、余波で日頃のトレーニングは厳しく、やってもやってもメニューは厳しくなる一方で、毎回吐く思いであった。合宿に入っても厳しさは変わらない。一本滑り終わっても、上りは下から押し上げられ、もたもたしているとどやされ、一気に上らされた。毎日へとへの思いであった。厳しさの中にも良き先輩、後輩に恵まれ、和気あいあいの楽しい合宿であった。スキー部に4年間在籍したが雪不足で大会中止、自身の怪我等で理工系大会には一度も出場できなかったのは残念であった。

1964年学園紛争で授業もままならない6月に行った乗鞍岳合宿は、残雪も多く風光明媚で爽快な合宿であった。雨でスキーができないときは、合宿中は禁止であったが、紙で麻雀牌を作って頭の訓練による暇つぶし、11月の立山は前日までの大雪で弥陀ヶ原から天狗平まで食料、米を担いでの徒歩入山となり大変難儀した合宿であったが、豪快なスキーが楽しめた。

合宿で最も印象的なのは猪苗代で回転練習中、突然、華麗さっそうと滑る人が現れた。誰かと思

いきや、あの猪谷千春さんであった。地元の高校生を連れて合同練習を申し込まれ、あつという間にコース設定、「さあどうぞ」と言われて滑りだしたが、緊張のあまり皆こけてしまった。猪谷千春さんのスキーに皆惚れ惚れと見とれてしまった。

合宿は事故あり事件あり、楽しく学生時代を過ごし、人間関係を勉強させられた。

### ◇スキー部の思い出

26期 応化 山本 純

1965年に関東理工系大学対抗スキー大会(インカレ工学部版)第1回大会が開催された。アルペンスキー3種目(滑降、大回転、回転)とノルディック距離10キロの総合成績で争うものであった。当時は、距離陣が手薄で、アルペン3種目のみエントリーした。

第2回1966年の猪苗代大会は、雪不足で残念ながら中止、第3回1967年猪苗代大会では、大回転優勝、回転2位を獲得し総合3位と躍進した。

翌年の第4回野沢大会から、アルペンもこなす宮坂選手(現歯科医)を距離陣に補強し、全日本距離選手の高橋さんのコーチングを受け、万全の体制で大会に臨んだ。結果は、大回転優勝、回転優勝、滑降10位などあと一歩で総合優勝を逃がしたが優秀な成績を残せた。

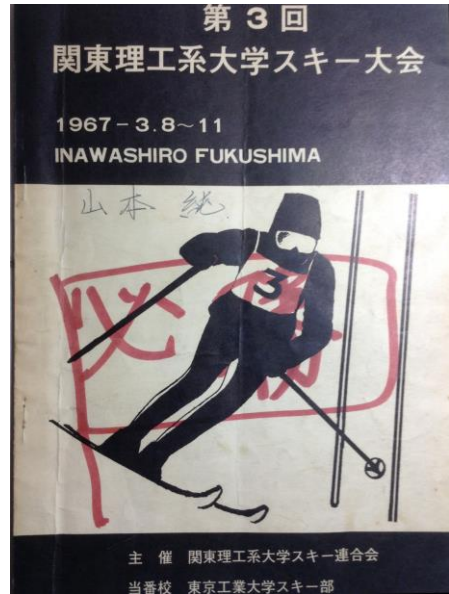
不運にも練習中の怪我で出場できなかった先輩や、年に2回も骨折した兵もいた。

### ◇スキー部と私

26期 機械 西村 守史

1年生のときからスキー部に在籍していた。入部の動機については記憶していない。1年生は1人だけで、たくさんの先輩に囲まれ、気後れしたことを覚えている。

最初のスキー合宿は野沢温泉だった。このときの一番の思い出は練習用ポールといっても竹竿を50本程まとめてリフトで持ち上げることである。スキー技術もままならぬ私が突然、竹竿を持ってリフトに乗ることは勇気の要ることだった。当時の竹竿は細くなく、洗濯物干し竿に等しいく



第3回関東理工系大学スキー大会プログラム

順位	氏名	所属	時間
1	高野敏朗	大工	45:00
2	中谷繁	津田大	45:06
3	佐々木雄一	津田大	45:00
4	竹村光	津田大	46:00
5	岩崎三	津田大	47:00
6	山本純	法政大	48:04
7	山本純	法政大	48:06
8	山本純	法政大	48:09
9	山本純	法政大	48:14
10	山本純	法政大	48:18
11	山本純	法政大	48:22
12	山本純	法政大	48:27
13	山本純	法政大	48:32
14	山本純	法政大	48:37
15	山本純	法政大	48:42
16	山本純	法政大	48:47
17	山本純	法政大	48:52
18	山本純	法政大	48:57
19	山本純	法政大	49:02
20	山本純	法政大	49:07
21	山本純	法政大	49:12
22	山本純	法政大	49:17

滑降競技公式記録

第3回関東理工系大学スキー大会



第4回関東理工系大学スキー大会  
優勝トロフィー(山本)

らい太く長いものだった。リフトを降りて練習地点まで竹竿を抱えて滑ることなのだが、これがさらに勇気を要した。今の練習用ポールはプラスチック製で軽くなっている。

最近スキー人口が極端に減少しているが、その原因は何なのだろうか？ スキー場に行ってもスキーをしているのは、爺婆ばかりである。若者、子供、家族連れなどほとんど見かけない。スノーボーダーが多くなったと言っているが、極端に増加したわけでもないらしい。寒く、冷たい冬のスポーツは毛嫌いされているようである。スキーの復活は当分ないとのレポートも出ており寂しい限りである。

理工学部スキー部出身者でまだスキーをやっている人のアンケートをとれば面白い結果が出るのではなかろうか！

## ◇体育会スキー部

30期 管理 山口 正隆

私が入学した1968年4月は学園紛争真っ盛りで、当時1年間だった教養課程の日吉は、夏過ぎまで封鎖されていた。日吉における大学の活動が休止状態だった一方、小金井に行く機会も無かったため、部活動に加入する機会は全くなかった。

翌年になって学園紛争も山場を越え、日吉での諸々の活動が復活する中、小金井の専門課程に進級した。この年は、小金井から矢上へのキャンパスの移転を控え、翌年以降の新入生の生活が総て日吉になる、その初年度であった。すなわち、我々が小金井最後の年度で、後輩が1人も小金井に来ないということであった。

このような状況の中で、部活動やクラブの選択における日吉指向が非常に強まっていた。当然私も日吉のクラブへの加入を考えましたが、工学部スキー部の先輩諸氏からの勧誘を受けて入部した。

強力な入部勧誘の理由が部活動の維持・継続で、その点に意義を感じて入部を決意した。当時の部員構成は、4年生は5人と多かったものの、3年生が1人(ディスタンス)のみだった。2年生が入

部しないと、その下級生の日吉オンリー組への働きかけが難しいことと相まって、部が完全に消滅してしまう可能性が高い状況にあった。

そこでまず自分が入部し、仲間2人を誘い、さらにこの3人の活動を見て1人が加わり、最終的に2年生が4人になった。

次の年度は、日吉での勧誘に努めた結果、5人に入部してもらうことができた。さらに、その次の年度は7人に増え、私が3年～4年シーズンのときには、部員総数は16人に達した。このような状況の中、私は2年～3年と3年～4年の2シーズン主将を務めることになった。

部としての活動であるが、私が2年～3年のシーズン(1969年～70年)は、合宿も、唯一の公式戦である第6回関東理工系大学スキー大会(1970年3月)も、共に野沢温泉であった。アルペンは、滑降、大回転(1本)、回転の3種目で、滑降のバーンは水無ゲレンデ～牛首尾根～日陰ゲレンデ、また大回転と回転はチャレンジコースを使った。我が部からの参加は7人で、2年生が4人、1年生が3人だった。ディスタンスにも2人が出場したと記憶している。残念ながら入賞者はいなかった。

その次のシーズンも、合宿と公式戦は共に野沢温泉であった。1971年3月の第7回では11校(12部)、すなわち、慶應工学部(工学部体育会)、早稲田(クラブ)、法政(クラブ)、日大理工、日大津田沼、東洋、東海、理科、千葉工、武蔵工、電機、工学院が参加した。この年の関東理工系スキー大会のアルペン競技は、当初予定されていた滑降が、前年に事故が相次いだために、野沢温泉の運営受託側から「責任が持てないと」の意向が示され、急遽中止となり、大回転(1本)と回転のみが行われた。我が部からの参加は16人で、大回転で山口が3位に入賞した。ディスタンスは上記16人のうちの8人がエントリーし、少なくとも3人が出場した。1973年3月に開催された第9回関東理工系スキー大会(志賀高原)のプログラムを見ると

滑降が復活している。

第9回大会では、東邦、相模工、日工大が加わり、14校(15部)となった。この第9回志賀高原大会では、アルペン滑降、大回転、回転共に西館山を使用、ディスタンスは個人距離15キロ、リレー共に一ノ瀬であった。我が部からの参加は16人で、このうちディスタンスのみのエントリーは3人。ディスタンスには合計8人がエントリーし、少なくとも3人が15キロとリレーに出場したと思われる。ディスタンスの選手層が厚かったのがこの時代の我が部の特徴である。

理系の単科大学からは、いわゆる体育会が参加するので、雪国出身の上手な選手が出場することがあった。自分が経験した野沢での滑降は、このような雪国出身者が大会運営側の野沢温泉との折衝を担い、自分達に合わせた形で競技を行っていた。しかし、各大学共に選手層が薄いので、これをこなせるのはせいぜい第2～第3シードまでというのが実態だった。したがって、それ以降のシードの選手には少々無理で、事故が頻発したと考えられる。

我々の代は、小金井組4人は小金井の多磨霊園で、それ以降の年度はすべて日吉で、という組み合わせで夏の陸トレを行った。これが2年間続いたため、顔を合わせる機会がとても少なく求心力の維持に苦労した。陸上の公式戦としては、毎年秋に、関東理工系スキー大会の陸上駅伝大会があった。

## 第2部 矢上移転後

### 1972年から現在まで

#### ◇スキーブームの予感

31期応化 大歳 恒彦

我々の入学時には、東大安田講堂事件に代表されるような学生運動が全国的に盛んで、大学そのものが不安定な時期にあった。今では信じられないが、慶應でも入学はしたものの「大学立法」な

どを巡る全学ストライキによって、半年間近くも授業が中断していた。このような社会の不安定な状況下で、自らの「居場所」を求めてクラブ活動に一生懸命になっていた面もあったのかと思う。

今でも矢上でのトレーニングや、冬季の野沢温泉、夏季の乗鞍岳での合宿などの様子を懐かしく思い出す。スキーをする人はまだそれほど多くはなかったが、在学中に札幌冬季オリンピックが開催され、その後のスキーブームの先駆けになった時代だった。札幌の前のグルノーブルオリンピックの記録映画である「白い恋人たち」は、私達のお気に入り、中でもアルペン種目三冠王になったフランスのジャン・クロード・キリーはあこがれの的、彼と自分のスキー姿をどこかで重ねていた部員も少なくなかった。

板や靴などの用具の改良も急速に進んだ時期であった。いろいろな新素材のスキー板が発売され、また革靴からプラスチック製の靴への移行など、自分たちのスキー技術の進歩の多くが用具の発達によっても支えられていたのだと思われる。

我々の入部時には、合宿のミーティングもひとつのコタツを囲んでできるようなこぢんまりとした構成だったが、その後は一般的なスキー人気の増大も後押しして、隆盛の時代を迎えることになった。トレーニングで体操するときには、矢上の校舎前の空きスペース(当時はかなり大きなスペースがあった)をフルに使うような人数になり感激したものである。私自身は、学力不足のために2年生から3年生に進級することができずに卒業には5年間を必要としたが、留年した年には、時間が余っているのをよいことに、春・夏のスキー、および冬季シーズンと年間で約80日間もスキー場にいたことが思い出となっている。

当時、部長であった管理工学科の林教授をはじめ、多くの先輩、同輩および後輩の方々からいろいろの刺激をいただき、その後の社会人としての生活があったのではないかと考えている。

#### ◇理工体スキー部創立50周年

35期機械 渡辺 康隆

私が工学部スキー部に入ったのは1973年、40





卒業アルバムから(1977年)

年も前のことになる。慶應工学部ならびにスキー部に在籍していたのは僅か4年だけであるにもかかわらずスキー部との付き合いは卒業以降もずっと続いており、既にその10倍の40年を越えている。この寄稿文を綴りながら、わがスキー部50年の歴史の中で、自分が40年も付き合っていることに大きな驚きと誇りを感じている。

近年は、スキーへの一時の人気・隆盛はまったく影を潜め、マイナースポーツとなってきた。さらに競技スキーをやろうという輩はすっかりいなくなり、わがスキー部も部員減少により存亡の危機を迎えるに至った。10年ほど前に何とかこの危機を乗り越え、現在は細々と活動を続けている。

この頃、スキーについて自分が思うのは「競技スキーをしていたことを忘れていない」ことである。記憶ではなく、身体が忘れていないという意味である。今でも年に1回はスキーに行くことにしている。気がつくとき滑っている最中にまだ漕いでいるのだ。漕いでいるうちは、体が競技スキーを忘れていないことだと本人は思って、勝手に何となく安心している。

2014年は「慶應義塾理工体スキー部創立50周年記念総会合宿」を実施する。草創期の先輩から現役の学生まで、雪上で一同に会し、できればレースをやりたい。本当は我々がご厄介になった宿で開催したいのだが、野沢の「かめや」は名前を変え、飯森の「田中館」は廃業した今は、それも叶わない。でも「全員が同時に同斜面を滑る」、これだけは実現したいと思っている。

## ◇理工体スキー部の思い出

39期応化 林 喜宏

日本という国は、アジア大陸から太平洋に張り出した島国で、北すぎることもなくまた南すぎることもない地球上の立ち位置から、冬になれば山に雪が積もる。その結果、冬いや正確には夏以外には、植物すなわち有機物と土すなわち主に無機化合物で覆われていた地表が、固体状態の水、すなわち、雪で覆われることになる。この固体状態の水は、圧力を加えると物理化学の法則に従って表面に液体状態の水の被膜が生じ、摩擦係数がきわめて小さくなる。雪で覆われた山には傾斜があることから、人は摩擦係数の小さなその斜面を“うまく”滑ってみたいくなる。それは、地勢上そして物理化学上、きわめて自然な衝動であり、感動の源泉でもある。

ところで、自然発生的感動に人工的な薬味を“少し”加えることで、異次元の感動に化学変化することがある。例えば、自然の恵みである雪面に旗門を立て、人が滑り下る経路を制限し、その時間を測り、人々の間で競べあう。この時空の制限により、個人的感動から集団的感動と変化する。競技スキーとはこのような時空を制限した自然を対象としたスポーツで、その個人的感動を父から、そして集団的感動を慶大・理工体スキー部から教わった。



1985年機械科卒渡部晃久 1984年3月岩岳

私が理工体スキー部に在籍したのは1978年～1982年、父親が部長であった。何しろ楽しかった。ヘルメットを介して伝わるゴーゴーとした風切り音、五竜岳裾野に位置する田中館、田中館のおじちゃんの夢のような昔話とおばちゃん的笑顔、白馬高校スキー部の最強姉妹、小野さんのジャイアント馬場の物まね、今でも歌える「信濃の国は信州の…」、“ユリちゃんジャッキー”と“そばや”、スキーワックスの香り、折れたクロカンの板、野沢温泉風呂の岩壁とそれをよじ登る怪しい影、蓼科山荘のグランド。そう、理工体スキー部の活動は合宿が長かったから。これらのすべては、現実の映像・音・香・触感として今でも、ほらココにある。

私はこの文章を通勤電車の中で書いた。渡辺監督の督促を受けながら、日本の半導体産業をどうするか悩みながら、その合間に思いつくままに書いた。だから文章・内容・トーンもちぐはぐ。でも、書いているだけでも楽しかった。それが私の中の理工体スキー部、きっと諸先輩・同期・後輩の方々も同じと思う。

## ◇思い出

48期電気 中野 誠彦

陸上トレーニングはいつも矢上校舎の、当時まだプレハブの部室に集合し、ランニングや筋トレ、球技などで体を鍛えていた。ランニングでは、通称ショートと呼ばれ、矢上川沿いを綱島方面に向かって走り鶴見川と合流するあたりで対岸にわたり折り返すコースをよく走った。新幹線の下をくぐって綱島街道で折り返す、ロングと呼ばれるコースもあった。練習後には、今はマンションになってしまったロイヤルホストに行って先輩たちにご馳走してもらうのが楽しみだった。人数が少ないときは、こちらは今も健在の大門駐車場に面する喫茶店オコでお茶した。

夏合宿は立科山荘の女神湖の周回コースが定番だった。夜はロケット花火で羽目を外したり、訳もわからず部屋に呼ばれて攻められるポンポンという通過儀礼もあった。

冬合宿は五竜飯森の田中館を定宿とし、八方や



OB 戦終了後(1993年頃)

コルチナにも遠征に出かけていた。当時スタッドレスタイヤは普及しておらず、車ごとにチェーン装備の速さを競った。リーゼンスキークラブとの対抗戦も田中館から出かけた。

OB 戦は飯森ゲレンデでやることが多く、トランシーバーで交信しながら手動ストップウォッチで計測をした。1年生のときには雪不足のため八幡平で合宿が行われたが、宿泊したユースホテルの条件が厳しくつらい合宿だった。料理人のいない宿の食事が貧相で、皿洗いも自分たちで行った。部屋の不足からか、二段ベッドのある部屋の床で寝るようにいわれ、そこには窓がしっかりしまらない廊下から雪が吹き込んで、枕元に雪が積もった。スキーウェアを着込んで布団に入った。強風で停電までおき、リフトが動かず、宿の暖房もつかずで、小さなこたつに身を寄せ合って暖をとった。未だ忘れられない経験である。

良い思い出には、野沢温泉での合宿で、毎晩暖かい温泉につかりながら、競技専用バーンのカンダハーコースでトレーニングを行ったことがある。ナショナルチームのコーチも務めた河野さんにおいしい贅沢な合宿を持た。おやつの温泉まんじゅうやワールドカップパフェが記憶に残っている。関東理工系、全塾、岩岳スキー大会が目標大会で選手に選ばれるよう部内のタイムレースも真剣勝負だった。強風のSLにレーシングワンピースをきて望んだのは時代の先端をいっていたのだと思う。

## ◇総括

スキーは積雪期だけしかできないシーズン限定のスポーツであり競技である。普段の練習は「陸トレ」といい、中身は走ることばかりである。それがシーズンに入ると、合宿生活が前提となり、連日連夜寝食を共にする仲になる。いやというほど仲間との接触が多いスポーツである。なおかつ、合宿では年功序列がすべてに優先し、それを根源とする礼儀を叩き込まれる。そんな環境だから否が応でも個性豊かな集団になる。滑りはもちろん、普段の交友関係にも個性の出ることが半端ではない。これは昔も今も変わらない。

入部してくる部員の中には経験者もいれば、競技スキーの未経験者も多い。競技経験の有無は、滑ってみると差が歴然としている。入部の時点からエースとその他大勢が区別されてしまう。これが、競技スキーを目指す我が部の宿命である。普段の練習では走っているだけなので、工学部の運動会のマラソンは、練習の成果を見せる格好の場であった。ところがここでも走るのが得意(主にノルディックの選手)のエースとその他大勢が区別される。皮肉なものだ。

クラブ内の序列が明らかになってしまうスキー一部でも、部内の交友環境は他に類を見ないほどに熱く深い。活動の大半が合宿で、好むと好まざるとに関わらず寝食を共にしなければいけない。これが仲間意識の根源であり成長剤でもあり、他に誇る我が部の特徴である。

その合宿の場となった定宿は、古くは野沢温泉の「かめや」、次に五竜遠見の「田中館」であった。残念ながらこの二軒とも今はない。物理的に建物は未だ存続しているが、正確に言うと「かめや」は経営が変わり、「田中館」は廃業した。返す返すも残念である。

現在の理工体の他部を見ると、他学部の学生が多いようだが、我がスキー部の一番のこだわりが、理工学部へのこだわりである(であった)。そのおかげもあって、10年ほど前には部員減少により存亡の危機が訪れた。何とか策を講じて、この危機を乗り越えたが、スキーが人気スポーツだった頃の勢いはなく、スキー部を細々と続けているのが現状である。この状況はいずれ打破しなければいけない。



Keio Univ.S.&T.Ski Racing Team						
卒業	期	部員数 (卒年毎)	主将の年度 (原則3学年) 活動シーズン	部長	各期主将 (3学年時)	トピックス
—	—	—	～1963/3	佐藤力	千葉健彦(2年)	同好会から工学部体育会スキー部として創部、 初めてのスキー合宿を野沢温泉「かめ屋」で行う
1965/3	23	16	～1964/3		阪田 勇	関東理工系スキー連盟の創設に参加
1966/3	24	6	～1965/3		井上泰夫	第1回関東理工系スキー大会於猪苗代、参加大学12校でアルペン3種目で争う
1967/3	25	2	～1966/3		栗田容豪	第2回関東理工系スキー大会於猪苗代、雪不足で中止
1968/3	26	5	～1967/3		山本 純	第3回関東理工系スキー大会於猪苗代、山本純:大回転1位、
1969/3	27	8	～1968/3		阿部久正	第4回関東理工系スキー大会於野沢温泉、山本純:大回転1位、回転1位 アルペン3種目の他に15km距離競技が加わる。
1970/3	28	5	～1969/3		皆川正明	第5回関東理工系スキー大会於野沢温泉、
1971/3	29	1	～1970/3		山口正隆(2年)	第6回関東理工系スキー大会於野沢温泉。合宿は「かめ屋」
1972/3	30	4	～1971/3		山口正隆	第7回関東理工系スキー大会於野沢温泉、山口正隆:大回転3位。合宿は「かめ屋」
1973/3	31	5	～1972/3		小鶴 昇	
1974/3	32	7	～1973/3		磯野光伸	第9回関東理工系スキー大会於高湯温泉
1975/3	33	2	～1974/3		魚住 明	第10回関東理工系スキー大会於猪苗代
1976/3	34	3	～1975/3		江井良治(2年)	第11回関東理工系スキー大会於猪苗代、五竜遠見の「田中館」を宿所に、全塾大会が復活し参戦する
1977/3	35	12	～1976/3		伊藤清志	第12回関東理工系スキー大会於野沢温泉
1978/3	36	4	～1977/3	丹下盛猛(2年)	第13回関東理工系スキー大会於野沢温泉	
1979/3	37	6	～1978/3	小野 守	第14回関東理工系スキー大会於野沢温泉、小野: 回転3位 *水崎さん、滑降練習で転倒・大けが	
1980/3	38	5	～1979/3	二木信夫	第15回関東理工系スキー大会於野沢温泉	
1981/3	39	7	1980	林 喜宏	第16回関東理工系スキー大会於野沢温泉、玉川: 回転3位、近藤: 大回転 6位 第1回OB/OG戦開催@五竜遠見/田中館	
1982/3	40	8	1981	今井三也	第17回関東理工系スキー大会於野沢温泉@カメヤ旅館	
1983/3	41	2	1982	久慈直洋	第18回関東理工系スキー大会於野沢温泉@カメヤ旅館	
1984/3	42	6	1983	森 裕之	第19回関東理工系スキー大会於野沢温泉	
1985/3	43	12	1984	渡部晃久	第20回関東理工系スキー大会於野沢温泉	
1986/3	44	10	1985	古川直成	第21回関東理工系スキー大会於野沢温泉	
1987/3	45	13	1986	清田茂之	第22回関東理工系スキー大会於野沢温泉	
1988/3	46	11	1987	中橋兼司	第23回関東理工系スキー大会於野沢温泉、全国学生岩岳大会、全塾、リーゼン戦	
1989/3	47	13	1988	井関裕靖	第24回関東理工系スキー大会於野沢温泉、全国学生岩岳大会、全塾、リーゼン戦	
1990/3	48	5	1989	田辺友二郎	第25回関東理工系スキー大会於野沢温泉、全国学生岩岳大会、全塾、リーゼン戦	
1991/3	49	11	1990	中島章夫	第26回関東理工系スキー大会於野沢温泉、全国学生岩岳大会、全塾、リーゼン戦	
1992/3	50	4	1991	山田善之		
1993/3	51	11	1992	山内哲矢		
1994/3	52	9	1993	石橋信正		
1995/3	53	6	1994	日比祥友		
1996/3	54	10	1995	伊藤 豪		
1997/3	55	4	1996	山崎哲也		
1998/3	56	4	1997	小山 崇		
1999/3	57	7	1998	加藤雄一郎		
2000/3	58	1	1999	大川博之		
2001/3	59	3	2000	浅川敏学		
2002/3	60	1	2001	熊坂夏彦		
2003/3	61	1	2002	熊坂夏彦		
2004/3	62		2003			
2005/3	63		2004			
2006/3	64		2005			